

坂口安吾

欲望について





# 欲望について

— プレヴオとラクロ —



私は昔から家庭というものに疑いをいだいていた。愛する人と家庭をつくりたいのも人の本能であるかも知れぬが、この家庭を否応なく、陰鬱いんうつに、死に至るまで守らねばならぬか、どうか。なぜ、それが美德であるのか。勤儉の精神とか困苦耐乏の精神とか、そういう美德と同じように、実際は美德よりも悪徳にちかいものではないかという気が、私にはしてならなかった。

多くの人々の家庭はたのしい棲家すみかよりも、私にはむし

ろ牢獄という感じがする。そしてなぜ耐乏が美德であるかと同じように、この陰鬱な家庭についても、人々は、それが美德であり、その陰鬱さに堪え、むしろ暗さの中に楽しみを見いだすことが人生の大事であるという風に馴ならされてきた。ただ「馴ならされてきた」のだとしか思うことができなかつた。

私はマノン・レスコオのような娼婦が好きだ。天性の娼婦が好きだ。彼女には家庭とか貞操という観念がない。それを守ることが美德であり、それを破ることが罪悪だという観念がないのである。マノンの欲するのは豪華な

陽気な日ごと日ごとで、陰鬱な生活に堪えられないだけなのである。

彼女にとって、媚態びたいは徳性であり、彼女の勤労ですらあった。そこから当然の所得をする。陽気な楽しい日ごと日ごとの活計のための。

たぶん太古は人間たちはそんなふうの日ごと日ごとを陽気に暮らしていたのかもしれない。どうも秩序がなくては共同生活に困るといっているので、社会生活というものが起こってきて、今度は秩序のために多くのことを犠牲にし、善悪美醜幸不幸、なにがその本体やらコントンとし

て分かちがたい物質精神相食あいはみ相重なりわけのわからぬものができ上がったのだらうと思う。人生とは何か、いわく不可解。私の考えでは、不可決というのだ。私は決して家庭が悪いと断言しない。断言ができないのだ。この人生に解決があるとは思わないのだから。

要するに人間には社会生活の秩序が必要であるが、秩序は必ず犠牲をともなうもので、この両方をはかり秤にかけて公平に割りだすような算式が発見されるはずはない。要するに今あるよりも「よりよいもの」を探すことができるだけだ。絶対だの永遠の幸福などというものがある



はずはない。

私は勤儉精神だの困苦欠乏に耐える精神などというものが嫌いである。働くのは遊ぶためだと考えており、より美しいもの便利なもの楽しいものを求めるのは人間の自然であり、それを拒み阻はよむべき理由はないと信じている。もつとも私は、遊ぶことも、近ごろはひどく退屈だ。

私の心をほんとうに慰めてくれる遊びなど、私はこの現実  
に知らず、また、見いだしていない。

マノン・レスコオの作者プレヴォは本職はカトリックの坊さんであるが、神、絶対について考え、人間の幸福

について考える一人の僧侶が天性の娼婦を描き、その悪徳を地上の至高の美果のごとくに描きだしたということはあるいは大いに自然のことであろうと思う。そしてマノンの天性はまた女一般の隠された天性でもあるが、天国の幸福を考える前に人間が地上の幸福を追求するのも自然で、しかし、人間はほとんど生れながらにして天国のために地上を犠牲にしているのだが、かかる訓練と習慣と秩序に対して、僧侶自身が反逆し疑うことは思想の正規の発展の段階であり、毫も不自然ではないのである。疑ぐらず反逆しないのが不思議なのだ。

人間の動物性は社会秩序という網によってすくいあげることが不可能で、どうしても網の目からこぼれてしまう。そして我我はそういう動物性を秩序の網にすくいあげることができないので悪徳であるというのであるが、しかしその社会生活の幅、文化というものが発展進歩してきたものは秩序によるよりもその悪徳のせいによることが多いのである。

日本軍部がヨーロッパ文明をさして墮落と称したのも、いわれの無いことではない。もし人間が人間の社会性に重点を置き、秩序によって人間を完全に縛りつけよ

うとするなら、それはいわゆる武士道のごときものとなり、人の個性は失われ、個性に代わるに制服、たとえば武士という一つの型の制服の中の、いわば人間以外の生物になってしまふ。または小笠原流という礼儀の中の武士の娘であり妻であつて、女でも人間でもないのである。そして人間の欲望は禁じられ、困苦欠乏に耐えることが美德となり、自我でなしに、他に対する忠誠が強要せられる。これは蟻ありの生活だ。けだし戦時中ある軍人は蟻の生活を模範としそのごとく働けと言つた。

もし人間が自我について考えるなら、自我の欲望と社

会の規約束縛の摩擦や矛盾について、考えるという生活がまず第一にそこから始まるのは自然ではないか。日本人とても例外ではない。すべての人々が考えるのだ。けれども一般に人々はこう考える。古い習慣や道徳を疑ぐることとは自分の方が間違っているのだ、と。そして古い習慣や道徳に、自我の欲望を屈服させ同化させることを「大人らしい」やり方と考え、そういう諦あきらめの中の静かさかほんとうの人間の最後の慰めであり真善美を兼ねそなえたものだというふうに考えるのだ。

私は不幸にして、そういう考え方でできない生れつき

であつた。私は結婚もしないうちから、家庭だの女房の暗さに絶望し、娼婦（マノンのような）の魅力を考え、なぜそれが悪徳なのか疑ぐらねばならないようなたちだつた。その考えはいわゆる老成することなしに、ますます馬鹿げたふうに秩序をはみだす方へ傾いて行くばかりであつた。だが、私にはわからない。今もって何もわからないのだ。

プレヴオによつて発見されたこの近代型の娼婦はその後今日に至るまで多くの作家の作品の中に生育発展し、ユロ男爵のごとくそれに向かつて特攻隊的自爆を遂げる

勇士も現われ、その反動の淑徳もまたおのずから新たに考察せられてきた。もっともドストエフスキーのごとくおよそあらゆる背徳について饒舌すぎる観念を弄しながら「気質的」にかかる娼婦に多くふれ得ない作家もあり、彼の娼婦はおおむね日本一般の常識のごとく、貧ゆえに身を売らねばならなかった汚濁に沈む悲惨な運命の子であり、しいたげられ踏みつけられた人々なのだ。まれに賭博者の中の女大学生やブランシユ嬢のごときものも現われても、その天性の娼婦的性格に対して人間そのものの本質からの誠意ある考察を払っていない。彼は気質的

にかかる女の性向と離れており、それゆえに彼の観念には多くの甘さのあるゆえんでもある。もつとも当時のロシヤは現在の日本のごとく貧乏な世界の片田舎で、たとえば文化の庶子であるかかかる天性の大娼婦が現われていなかったのも事実であろう。しかし、観念は、そういう現実によって限定されるものでもない。

日本では美しいものは風景で、庭などに愛情を傾けるのであるが、人間のノルマルな欲求が歪められ、人間的であるよりも諦観ていかん自体がすでに第二の本性と化した日本人が、人間自体の美よりも風景に愛情を托したのは当然



であつたに相違ない。しかし、人間にとって、人間以上に美しいものがあるはずはない。

マノンはその情夫の青年を熱烈に愛しているのであるが、他の男を媚態によつて迷わし貞操を売ることを、貞節への裏切りであるというふうな考え方が本来欠けているのである。豪華な楽しい生活のためには媚態が最高の商品で、その商品としての媚態に対して、最高の商人的な徳義と良心を持っている。その良心は優秀なる媚態とということ、貞操などとは無関係だ。貞操などというものは単に精神上に存在するのみであつて、物質としては

一顧の価値もない。根柢的な物質主義を基盤として成り立っている娼婦の思考は無貞操ということに罪悪感を持ち得ず、男を無上に喜ばせるということに対して当然にして、莫大な報酬を要求しているだけのことだ。マノン・レスコオの場合においては、その薄命の最後に至るまで変わらざる愛人があったが、これはプレヴォ僧正のせめてもの常識的な道德に対する賄賂わいろであり、世の実相はおおむねこのごときものではないだろう。マノンの不貞節は一人の愛人に対する変わらざる真実の情熱によって徳義化しうる性質のものではない。もしそれが徳義化

し得るなら、それ自体の本質によってであるほかに道はない。

シヨデロ・ド・ラクロの「リエゾン・ダンジュルーズ」  
（危険な関係、と訳すべきか）はかかる天性の娼婦に高い身分（侯爵）と高い教育を与え、マノンにおいて盲目的であつたことが、最も意識的に、すなわち愛の遊戯を明確なる人生の目的とした男女の場合を描きだしたものである。侯爵夫人によれば愛の遊戯の満足は肉慾の充足自体ではなく、そこに至る道程の長い悩殺と技巧と知識の中にあるので、そのためにあらゆる観察と研究が行な

われているのである。この小説は昭和初年に猥本の限定わいほん出版物の中に訳されたことがあるのだが、愛欲に対する追求が誠実であるほど猥本の領域に近づくことは当然で、日本においては今日まで訳されて一般に流布する見込みの立たなかった作品だ。私はあらゆる本を手放したときにもこの原本だけはだいに所得していたのであるが、小田原の洪水で太平洋へ流してしまった。かかる人性への追求は永遠に「家庭」と相容れないものであり、その限りにおいて不道徳なものであるが、果たして「家庭」とは何物であるのか。家庭のために人は

かかる遊びへの欲望を抛棄ほうきすべきものであるか。思うに我々の陰鬱なる家庭は決してしかくあくまで守らねばならぬ値打を持つものではないだろう。我々の家庭は外形内容ともになお多くの変貌変質すべき欠陥があり、家庭の平穩に反することが、ただちに不道德を意味することはあり得ない。

通用の道德は必ずしも美德ではない。通用に反する不徳は必ずしも不徳ではなく、かかる通用の徳義に比して、人性の眞実というものにはいかなる刃物をもつてしても殺し得ぬ永遠のいのちがこもっていることを悟らざるを

得ないものだ。

欲望は秩序のために犠牲にせざるを得ないものではない。欲望を欲することは悪徳ではなく、我々の秩序が欲望の満足に近づくことは決して墮落ではない。むしろ秩序が欲望の充足に近づくところに文化の、また生活の真実の生育があるのであり、人間性の追求という文学の目的も、かかる生活の生育のための内省の手段として、その意味があるのだらうと思う。

人は肉欲、欲情の露骨な暴露を厭う<sup>いと</sup>。しかしながら、それが真実人によって愛せられるものであるなら、厭う

べき理由はない。

我々はまず遊ぶということが不健全なことでもなく、不真面目なことでもないということを身をもって考へてみる必要がある。私自身について言えば、私は遊びが人生の目的だとは断言することができない。しかし、他の何物かが人生の目的であるということ断言するなんらの確信をもっていない。もとより遊ぶということは退屈のシノニイムであり、遊びによって人は眞実幸福であり得るよしもないのである。しかしながら「遊びたい」ということが人の欲求であることは事実で、そして、その

欲求の実現が必ずしも人の眞実の幸福をもたらさないと  
いうだけのことだ。人の欲求するところ、常に必ずしも  
人を充すものではなく、多くは裏切るものであり、マノ  
ンも侯爵夫人も決して幸福なる人間ではなかつた。無為  
の平穩幸福に比べれば、欲求をみたすことには幸福より  
もむしろ多くの苦惱の方をもたらすだろう。その意味に  
おいては人は苦惱をもとめる動物であるかも知れない。







日本文学電子図書館

---

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店  
昭和45年1月30日 改版3刷

---



日本文学電子図書館